

高等学校日语教材

例
释

日语古典语法

李延坤◎编著



いろ にほ ち
色は匂へど 散りぬるを
うる おくやま けふこ
有爲の奥山 今日越えて

わ よたれ つね
我が世誰ぞ 常ならむ
あさ ゆめみ 系
浅き夢見じ 醉ひもせず

高等学校日语教材

例释

日语古典语法

李延坤◎编著

图书在版编目(CIP)数据

例释日语古典语法 / 李延坤编著. — 大连 : 大连理工大学出版社, 2012. 8
ISBN 978-7-5611-7123-3

I ①例… II. ①李… III. ①日语—语法 IV.
①H364

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2012)第 170350 号

大连理工大学出版社出版

地址:大连市软件园路 80 号 邮政编码:116023

发行:0411-84708842 传真:0411-84701466 邮购:0411-84703636

E-mail:dutp@dutp.cn URL:http://www.dutp.cn

大连美跃彩色印刷有限公司印刷 大连理工大学出版社发行

幅面尺寸:185mm×260mm 印张:12.5 字数:283 千字

印数:1~2000

2012 年 8 月第 1 版

2012 年 8 月第 1 次印刷

责任编辑:宋锦绣 张 凡

责任校对:杨 波

封面设计:张 虎

ISBN 978-7-5611-7123-3

定 价:28.00 元

序

延坤先生嘱为其新作《例释日语古典语法》作序，令我犯难。因为我没有对日本古典文法做过系统研究，很难从学术角度进行评论，只能以一个学习者的身份，谈一点学习体会。

日语称古典语法为「文語文法」，日语「文語」是对现代「口語」而言，指以平安时代语言为基础发展、固定下来的语言形式。用「文語」写出的东西，不仅对中国日语学习者，就是对日语母语者也是很难的。比如明治时期的「文語」作品便被叫成了“明治古典”，并出了现代日语译本。「文語」虽已不作为日常语言使用，但却不可不懂，因为无论是做研究亦或是欣赏文学作品，还是从事中日跨文化交流方面的工作，都会涉及到这方面的内容。

延坤先生的专业为日本古典语法，并一直从事该专业的日语教学工作，应该说这本书是他学术研究与教学实践的总结。《例释日语古典语法》具有以下特点：

- 一、内容丰富，涵盖面广。本书涉及了词法、句法及社会语言学范畴的敬语等内容，涵盖了日语古典语法的所有基本问题；
- 二、语言简洁，用例凝炼。本书在参考多部教材及参考书的基础上，尽量使用精炼的例句，并用简明易懂的语言进行说明，便于学习者掌握及使用者理解；
- 三、注重基础，学用结合。本书把基础知识的学习放到首位，注重以练习的方式巩固所学知识，并以名作鉴赏的方式引导学习者学以致用。

延坤先生这部作品的问世，初衷是显而易见的，那就是通过自己的努力，为学习者提供简单、便捷的掌握古典语法的平台，提升学习者对古典语法的兴趣，促进日语界的学术交流与合作。期望广大日语学习者能从《例释日语古典语法》中获得益处，祝延坤先生不断有新的成果问世。

是为序。

陈 岩

2012年5月于日本城西国际大学

目 录

第一章 古典文法入門

第一節 文語と口語

一、文語と文語文法	1
二、口語	1
三、古典文法	1
四、文語と口語の違い	1

第二節 歴史仮名遣い

一、五十音図といろは歌	2
1. 五十音図	
2. いろは歌	
二、歴史仮名遣いを読むときのルール	3
三、係り結び	4
練習一	5/163

第三節 文と文節、単語と品詞

一、文と文節	6
二、単語と品詞	7
1. 単語	
2. 自立語と付属語	
3. 活用	
4. 品詞	
練習二	9/163

第二章 活用のない自立語

第一節 名詞

一、名詞の性質	10
二、名詞の種類	10
1. 普通名詞	
2. 固有名詞	
3. 数詞	
4. 形式名詞	
5. 代名詞	

第二節 副詞

一、副詞の性質	12
二、副詞の種類	12
1. 状態の副詞	
2. 程度の副詞	
3. 叙述の副詞	

第三節 連体詞

一、連体詞の性質	14
二、連体詞の例	14
三、連体詞の種類	14

第四節 接続詞

一、接続詞の性質	15
二、接続詞の種類	15
三、接続詞の例	15

第五節 感動詞

一、感動詞の性質	17
----------	----

二、感動詞の種類	17
三、感動詞の例	17
練習三	18/164

第三章 活用のある自立語

第一節 用言

一、用言の種類	20
二、語幹と語尾	20
三、用言の活用形とその用法	21

第二節 動詞

一、動詞の性質	22
二、動詞の活用の種類	22
1. 四段活用	
練習四	24/164
2. ナ行変格活用	
3. ラ行変格活用	
練習五	28/164
4. 下一段活用	
5. 下二段活用	
練習六	32/165
6. 上一段活用	
7. 上二段活用	
練習七	37/165
8. カ行変格活用	
9. サ行変格活用	
練習八	41/166
三、動詞の音便	42
四、自動詞と他動詞	43
練習九	44/166

第三節 形容詞

一、形容詞の性質	45
二、形容詞の特徴	45
三、形容詞の活用	45
1. ク活用とシク活用	
2. カリ活用	
四、形容詞の語幹の用法	47
五、形容詞の音便	47
練習十	49/167

第四節 形容動詞

一、形容動詞の性質	50
二、形容動詞の特徴	50
三、形容動詞の活用	50
四、「ナリ活用」と「タリ活用」についての注意点	51
五、形容動詞の語幹の用法	51
六、形容動詞の音便	52
練習十一	53/167

第四章 活用のある付属語

第一節 助動詞の性質と種類

一、助動詞の性質	54
二、助動詞の種類	54

第二節 「尊敬・可能・受身・自発」と「尊敬・使役」の助動詞

一、尊敬・可能・受身・自発を表す助動詞「る・らる」	56
二、使役・尊敬を表す助動詞「す・さす・しむ」	57
練習十二	59/168

第三節 「打消」と「打消推量」の助動詞

一、打消を表す助動詞「ず」	60
二、打消の推量を表す助動詞「じ・まじ」	61
練習十三	63/168

第四節 「過去」と「完了」の助動詞

一、過去を表す助動詞「き・けり」	64
二、完了を表す助動詞「つ・ぬ・たり・り」	65
練習十四	69/169

第五節 推量の助動詞

一、推量を表す助動詞「む・むず」「けむ(けん)」「らむ(らん)」	71
練習十五	75/170
二、推量を表す助動詞「らし」「まし」「めり」「べし」	76
練習十六	81/171

第六節 断定・推定・伝聞・希望・比況の助動詞

一、断定を表す助動詞「なり・たり」	83
二、推定・伝聞を表す助動詞「なり」	84
練習十七	86/172
三、希望を表す助動詞「たし・まほし」	88
四、比況を表す助動詞「ごとし」	88
練習十八	90/172

第七節 奈良時代の助動詞

一、受身・自発・可能を表す助動詞「ゆ・らゆ」	91
二、尊敬を表す助動詞「す」	92
三、継続・反復を表す助動詞「ふ」	92
練習十九	93/173

第五章 活用のない付属語

第一節 助詞

一、助詞の性質	94
二、助詞の種類	94

第二節 格助詞

一、格助詞 が・の	95
二、格助詞 を	96
三、格助詞 に	96
四、格助詞 へ	97
五、格助詞 と	98
練習二十	99/173
六、格助詞 より	100
七、格助詞 から	100
八、格助詞 にて	101
九、格助詞 して	101
練習二十一	103/174

第三節 接続助詞

一、接続助詞 ば	105
二、接続助詞 と	105
三、接続助詞 ど・ども	106
四、接続助詞 が	106
五、接続助詞 に・を	107
六、接続助詞 て・して	107
七、接続助詞 で	108
八、接続助詞 つつ	108
九、接続助詞 ながら	109
十、接続助詞 ものから (ものの・ものを・ものゆゑ)	109
練習二十二	111/175

第四節 係助詞

一、係助詞	は……………	113
二、係助詞	も……………	113
三、係助詞	ぞ・なむ……………	114
四、係助詞	か・かは・や・やは……………	114
五、係助詞	こそ……………	115
練習二十三	……………	116/176

第五節 副助詞

一、副助詞	だに……………	117
二、副助詞	すら……………	117
三、副助詞	さへ……………	117
四、副助詞	のみ……………	118
五、副助詞	ばかり……………	118
六、副助詞	など……………	119
七、副助詞	まで……………	119
八、副助詞	し(しも)……………	120
練習二十四	……………	121/176

第六節 終助詞

一、終助詞	な……………	123
二、終助詞	そ……………	123
三、終助詞	な……………	124
四、終助詞	か(かな)……………	124
五、終助詞	は・も……………	124
六、終助詞	ぞ……………	125
七、終助詞	かし……………	125
八、終助詞	ばや……………	125
九、終助詞	なむ……………	126
十、終助詞	が(がな)——てしが・てしがな・にしが・にしがな・もが・もがな……………	126
練習二十五	……………	127/177

第七節 間投助詞

一、間投助詞 や・よ	128
二、間投助詞 を	128
練習二十六	129/177

第八節 奈良時代の助詞

一、格助詞 ゆり・ゆ・よ	130
二、格助詞 から	130
三、終助詞 な	130
四、終助詞 ね	131
五、終助詞 かも	131

第六章 敬語

第一節 敬語の種類

一、尊敬語	132
二、謙讓語	133
三、丁寧語	134

第二節 特殊敬語の表現

一、二方面への敬語	136
二、最高敬語	136
三、自敬表現	137
練習二十七	138/178

第七章 文

第一節 文の構造

一、文節相互の関係	139
二、特殊の文の構成	140

第二節 文の種類

一、文の構造上からの分類	142
二、文の機能上からの分類	142
練習二十八	144/178

第三節 修辞法

一、枕詞	145
二、序詞	145
三、掛詞	146
四、縁語	147

第八章 名作鑑賞

舞姫	148
答案	163
付録一：文語助動詞の活用表	179
付録一：文語動詞の活用表	181
后记	182
参考书目	184

第一章 古典文法入門

第一節 文語と口語

一、文語と文語文法

現代の口語に対して、特に平安時代語を基礎として定着した言語の体系、または、古文に用いられる言葉を文語という。その法則を文語文法という。

二、口語

話し言葉を基準とした文体の言葉を口語という。広く現代語を指すことが多い。

三、古典文法

古典としての古文には、現代語では使わない言葉がたくさんあるから、これを読解する場合、古い言葉の意味の解明が必要である。しかし、それだけでは十分ではない。古文の読解を、正しく能率的にしようとするには、文法上の知識に基づかなければならない。古典としての古文読解の基礎になるものとしての古語の文法を古典文法という。

四、文語と口語の違い

文語と口語は、どんな点が違うのだろうか。まず次の文を読みくらべてみよう。

1. けふも 窓べに にほふ 花かな / きょうも 窓べに におう 花よ。

(歴史的仮名遣い)

2. 馬□ 引きて 童□ ^{わらべ} 帰りぬ / 馬を引いて少年が帰った。

(助詞「を」「が」を省き、文語の助動詞も使う)

3. 老いたる□ あり / 年老いた 人がいる。

(文語の助動詞を使い、体言や形式名詞、助詞を省き、活用の違う動詞もある)

4. いと 大きなる 川□ あり / たいへん 大きな 川がある。

(活用の違う動詞もあり、助詞も省く)

5. 雪の 降る こそ□ うれしけれ / 雪が 降るのは うれしいよ。

(特別の決まりがあり、助詞も省く)

第二節 歴史仮名遣い

一、五十音図といろは歌

1. 五十音図

行 段	ア行	カ行	サ行	タ行	ナ行	ハ行	マ行	ヤ行	ラ行	ワ行
ア 段	あ	か	さ	た	な	は	ま	や	ら	わ
	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ
イ 段	い	き	し	ち	に	ひ	み	い	り	ゐ
	イ	キ	シ	チ	ニ	ヒ	ミ	イ	リ	ヰ
ウ 段	う	く	す	つ	ぬ	ふ	む	ゆ	る	う
	ウ	ク	ス	ツ	ヌ	フ	ム	ユ	ル	ウ
エ 段	え	け	せ	て	ね	へ	め	え	れ	ゑ
	エ	ケ	セ	テ	ネ	ヘ	メ	エ	レ	エ
オ 段	お	こ	そ	と	の	ほ	も	よ	ろ	を
	オ	コ	ソ	ト	ノ	ホ	モ	ヨ	ロ	ヲ

2. いろは歌

原文の「いろは歌」：

いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ
うゑのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせず

「いろは歌」は同じ仮名を二度使わずに、四十七音の清音を歌に詠んでいるのである。

漢字を当て、濁点を加えて、意味がわかりやすい「いろは歌」：

いろ にほ ち わ よ たれ そ つね
色は匂へど 散りぬるを 我が世誰ぞ 常ならむ
うゑ おくやま け ふ こ あさ ゆめ み ゑ
有為の奥山 今日越えて 浅き夢見じ 酔ひもせず

意味解説：

花の色は美しく照り輝くけれども、いずれは散ってしまう。それと同様にわれわれの世の中も誰が、変わらないことがあろうか、いや、移り変わるものである。移り変わりが激しい無常の世にたとえられる奥深い山を、今日も越えていくような人生で、浅はかな夢を見るようなことはしまい、また、世の中のことに心を奪われて、正気を失うようなこともしない。

二、歴史仮名遣いを読むときのルール

1. ワ行音「ゐ・ゑ・を」は「い・え・お」で発音する

「ゐ」→「い」 例：ゐど〔井戸〕→いど ゐなか〔田舎〕→いなか
 「ゑ」→「え」 例：こゑ〔声〕→こえ ゑつぼ〔笑壺〕→えつぼ
 「を」→「お」 例：をとこ〔男〕→おとこ をとめ〔少女〕→おとめ

2. ハ行の仮名は、語頭以外の音はすべてワ行の音で読む

はな〔花〕 ひかり〔光〕 ふところ へいけ〔平家〕 ほお〔頬〕
 かはら〔河原〕 こひのぼり ゆふ涼み 母うへ 草のいほり

3. a+u→o [あう (あふ)→おう]

あうむ〔鸚鵡〕→おうむ あうぎ〔扇〕→おうぎ かうし〔格子〕→こうし

4. i+u→yu [いう (いふ)→ゆう]

いうちよ〔遊女〕→ゆうじょ にふだう〔入道〕→にゅうどう

5. e+u→yo [えう (えふ・ゑふ・やう)→よう]

えうがい〔要害〕→ようがい けふ〔今日〕→きょう てふ〔蝶〕→ちょう

6. 「くわ・ぐわ」は「か・が」で発音する

くわきふ〔火急〕→かきゅう くわうせん〔黄泉〕→こうせん
 ぐわいせき〔外戚〕→がいせき ぐわんじやう〔願状〕→がんじょう

7. 「ぢ・づ」は「じ・ず」で発音する

ぢごく〔地獄〕→じごく ぢざう〔地藏〕→じぞう
 はづ〔恥づ〕→恥ず づきん〔頭巾〕→ずきん

8. 「む」は「ん」で発音する

行かむ→行かん

なむ→なん

三、係り結び

口語では、文を終止形で言い切るのは普通であるが、文語もそうである。しかし、文語ではこのほかに、連体形や已然形で結ばれることも多い。例えば、文の中で「ぞ・なむ・や・か」が用いられると、文末は連体形で結ばれ、「こそ」が用いられると、已然形で結ばれるのである。このような、文語独特のきまりを「係り結び」という。「ぞ・なむ・や・か・こそ」などはすべて係助詞であるから、助詞の章で詳しく述べることにする。

ぞ・なむ……（強意）	……連体形で言い切る
や・か……（疑問・反語）	……連体形で言い切る
こそ……（強意）	……已然形で言い切る
は・も……	主に終止形（命令形）で言い切る

例文：

1. これ^{ほんしやう}ぞなかなかに我本性なりける。（強意）『舞姫^{まひひめ}』
2. 腰^{こし}なむ動かれぬ。（強意）『竹取物語』
3. これや日記の成らぬ縁故なる。（反語）『舞姫』
4. 日ごとに幾千言をかなしけむ。（疑問）『舞姫』
5. 学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ。（強意）『舞姫』
6. 親に似て、これも恐ろしき心あらむ。『枕草子』